



由緒のあるふるやうのお社

郡山八幡神社(伊佐市大口大田)

NPO法人がこしま探検の会 東川隆太郎

「焼酎」という文字の初見とされる墨書の落書が発見されたことと有名な神社。それゆえに焼酎発祥の神社などと宣伝されたこともあるが、それ以外の歴史も味わい深い神社である。正式名称は八幡神社であるが、鹿児島県内を含めて全国に八幡神社は数多くあることから地名の郡山を冠して称されることが多い。

御祭神は神功皇后で、保元2(1157)年、この地域に勢力のあつた菱刈重妙によって勧請されたと伝わる。ちなみに勧請に関する伝説もある。当時、この地域は太良院とも呼ばれていた。そこに役人として赴任した菱刈重妙は、領内巡検の際にあるひとりの老僧と出会う。その老僧は、自分の居場所を豊前国の宇佐宮と伝え、自分を祀るならば重妙の子孫の守護を約束すると告げる。そのために重妙は羽月村にあつた若王寺の住持を宇佐宮に派遣して勧請するに至つたという。しかし、この伝説には矛盾もある。菱刈重妙が太良院に赴任したのは、建久5(1194)年であり、右記の勧請時期とは一致しない。勧請時期は、菱刈重妙の赴任時期と考へてもよいかもしれない。

その後も菱刈氏の保護を受けたが、現在の本殿附宮殿の建立は永正4(1507)年とされている。本殿は単層屋根入母屋造り柿葺きで、室町及び桃山形式の手法と琉球建築の情調が感じられるところが評価されている。その頃の菱刈氏の勢いも背景にあるといえよう。

本殿の解体修理を行われたのが昭和29年。その際に本殿北東の頭貫の先端部に永禄2(1559)年に記された木片が発見された。大工をしていた人物が書いたと思われる、要約すると、神社の管理者がケチで、修理の間一度も焼酎も飲ませてくれず不満であるということが記載されていた。神社の社殿内に書き残すとは、よほど腹立たしかったのであつたのであろう。しかしそのおかげで「焼酎」がその頃にはあつた、ということが伝わつたのである。

江戸時代には大口郷の総鎮守として信仰され、社殿も戦国期を経て現在に至るまで受け継がれることになる。美しい社殿に隠された人間味のある落書きは、時代が変わっても人の気持ちはさほど変わらないといつことを教えてくれるようである。



鹿兒島商工會議所青年部

「経験」が人を育てる 人が企業を先導する

企業的大小や年齢の上下、性別に関わらず

平等に「経験」が与えられる交流と研鑽の場



御社の大切な若手を
鹿兒島YEGの仲間として
ご紹介ください

鹿兒島YEGでは、多様な業種の経営者をはじめ
企業の中核を担う従業者、一人で事業を営む
個人事業主など様々な会員が活躍しています。

普段の業務では接することのない人々と
密接に関わり、協力し、交流して
若手の経験値向上に
役立てませんか？

新入会員募集！

鹿兒島商工會議所青年部(YEG)は、事業意欲あふれる新入会員を募集しています。青年部活動や異業種交流を通じて、経済人として一段の成長を図りたい方はぜひご加入ください。

青年部は平成4年9月の設立以来、あらゆる業種の方々が入会し、現在会員140人(令和7年3月1日時点)で活動しています。鹿兒島の地域づくりを考え、経済人としての人格と教養を高めるほか、委員会活動などで会員相互の啓発や親睦を深めるための活動も行っています。令和6年10月には約2900名の登録があった九州ブロック大会を鹿兒島で開催するなど、活力ある地域経済社会の実現に向け全力で取り組んでいます。

詳しくは青年部事務局までお問い合わせください

お問い合わせ 鹿兒島商工會議所青年部 TEL099-225-9534(事務局担当:平峯)

YEG HP



潮流を読む

「2024年の世界経済の

回顧と25年の見通しの留意点」

2024年は、世界経済が23年まで続いた“荒波”をようやく乗り越えた年であった。ここでの“荒波”とは、パンデミック後のサプライチェーンの混乱から始まり、ウクライナでの戦争による世界的なエネルギー・食料危機、インフレ率の急上昇、それに続き世界各国で同時進行した金融引き締めなどである。国際通貨基金（IMF）によると、24年の世界経済は“荒波”が消え、「非常にレジリエント（回復力がある状態）であり、インフレ率が目標水準に回帰していく中、成長率は安定的に推移している」（24年4月「世界経済見通し」という。24年10月「世界経済見通し」でも、総じて世界のインフレ率が低下する（世界の総

合物価上昇率の年間平均値は23年の6.7%から24年は5.8%に低下する）ため、世界経済の成長率は「安定的に推移」するとしており、24年と25年はともに、3.2%の成長率になると予想した。

国・地域別に主要地域の24年の景気動向を実質GDP成長率（前期比年率）で振り返ると、米国は金融引き締め効果により、年初1〜3月期に前期比年率2%を割り込んで減速し

たが、4〜6月期以降は3%程度の拡大となった。夏に雇用統計の悪化を受けて景気後退懸念が強まったものの、その後の経済指標の結果から米国景気の堅調さが確認され、金融市場が落ち着きを取り戻したことが背景にある。

欧州（ユーロ圏）は23年の停滞（ゼロ成長）を脱し、2%近い成長率まで持ち直してきている。欧州中央銀行（ECB）はインフレの減速を受けて利下げを開始し、欧州域内の経済を下支えしたことが一因に挙げられる。日本経済に目を向けると、自然災害や自動車の工場稼働停止、実質賃金の回復の遅れなどもあって停滞感が強かった。

24年の日本の実質GDP成長率は▲0.1%と、ドイツの▲0.2%に次ぐ、主要7カ国の中で2番目に低い成長率になる見込みだ。この背景の一つとして、訪日外客数は増加したものの、中国の景気減速などを背景に中国人訪日客数が伸び悩んだことがある。他方、賃金・物価上昇の持続性が高まったことを受け、日本銀行は利上げを実施するなど金融政策の正常化が進んだ。

中国の24年の実質GDP成長率は、政府成長率目標（5.0%前後）を達成した。不動産不況が継続したこともあって経済は減速したが、大規模な景気てこ入れ策で成長率が押し上げられた。

大和総研の25年の世界経済見通し「注1」では、日本1.6%、英国1.4%、3%、ユーロ圏1.3%、米国2.3%、中国4.5%となっているが、これを阻害し得る最大の懸念は、トランプ大統領の政策であろう。まず、自由貿易体制は同盟国間であっても容易に形骸化し、仮に関税引き上げが実施されれば、各国間での保護主義政策の応酬に発展する恐れがある。次に、世界の企業行動にも影響する供給体制の構築については、自国優先や経済安全保障優先への対応が一層強まる可能性がある。三つ目、財政政策については、24年の各国選挙で与党が軒並み苦戦したように、国民の生活不安や不満が高まっており、新政権にはその対処が求められるが、財政不安や過度の金利上昇が懸念される。最後に金融政策では、日米欧中の四極間での金融政策のスタンスの差は当面広がっていくと見られ、まちなちな金融政策の方向性は、状況次第でマーケットの大きな変動をもたらし得るだろう。

25年の世界経済は、昨年消えたはずの“荒波”が復活し、各国の経済が目指す正常化（ポストインフレ）に至るか、不確実性が高まる懸念がある。望ましくないインフレ再燃の芽は多く、そのレジリエンスが試される年と

なろう。

（2025年1月20日執筆）

「注1」大和総研経済調査部、ニューヨークリサーチセンター、「主要国経済 Outlook 2025年1月号（No. 458）」24年12月23日

株式会社 大和総研
金融調査部 首席研究員

内野 逸勢



内野 逸勢
（うちの はやなり）

PROFILE

静岡県出身。1990年慶応義塾大学法学部卒業。大和総研入社。企業調査部、経営コンサルティング部、大蔵省財政金融研究所（1998～2000年）出向などを経て現職（金融調査部 首席研究員）。専門は金融・資本市場、金融機関経営、地域経済、グローバルガバナンスなど。主な著書・論文に『地銀の次世代ビジネスモデル』2020年5月、共著（主著）、「FinTechと金融の未来～10年後に価値のある金融ビジネスとは何か？～」2018年4月、共著（主著）、「JAL再生 高収益企業への転換」日本経済新聞出版、2013年1月、共著。IAASB CAG（国際監査・保証基準審議会 諮問・助言グループ）委員（2005～2014年）。日本証券経済研究所「証券業界とフィンテックに関する研究会」（2017年）。

trend communication

ト
レ
ン
ド
通
信

「第二段階に入った世界遺産『熊野古道』の

インバウンド戦略」

和歌山県南部、紀伊半島の熊野地方。熊野本宮大社を中心とした熊野三山を結ぶ山中の参詣道が熊野古道です。2004年にユネスコの世界遺産に登録されたことをきっかけに、海外向けの情報発信を強化してきました。その結果、今では主に欧州からの旅行者が数多く訪れるようになりました。熊野古道の入り口に当たる紀伊田辺駅の売店や商店街のお店にも、リュックサックを背負ったトレッキングスタイルの外国人が毎日のように訪れています。

熊野古道は、外国人訪日客を誘致するためのプロモーションの代表的な成功事例として知られています。その戦略の中核を担った「田辺市熊野ツーリズムビューロー」の多田稔子会長にお話を伺いました。それまで地元住民にとっては「ただの山道」に過ぎなかった熊野古道が世界遺産として注目されたことを「これ

は100年に一度のチャンス」と捉えたそうです。地域のさまざまな受け入れ側の体制整備や英語での海外向け情報発信など、持続的な活動が実を結んだ結果、今のにぎわいにつながっています。

熊野古道は、深い森の中を縫うような細い峠道（そまみち）が何十kmも続くため、全部を歩いて回ろうとすると途中で何力所か宿泊が必要となります。今では熊野古道に沿った山中にゲストハウスが数多くつくられています。これまで、熊野古道を訪ねる外国人は欧州からの客が多数を占めていましたが、コロナ禍が明けてからはアジア（台湾やシンガポールなど）から訪れる人が増えたといえます。その分の人数が増えなくなった形で、ゲストハウスはいつも満杯となり、京都ほどではないにせよオーバートーリズムが懸念されるようになってきたそうです。

熊野古道は、もともと京都の白河、

鳥羽、後白河、後鳥羽上皇などが、京都からわざわざ何度も熊野を訪ねたことで整備され、世に知られるようになったものです。紀伊半島の山中に入るまでは海岸沿いをずっと南下して進んでいたため、大阪から和歌山県南部に至る途中にも史跡やストリーのあるスポットがたくさんあります。こうした道中を経て、口熊野（くちくまの）と呼ばれる田辺市までたどり着き、そこで海に入って身を清めてから、山中へ至る道へ向かいました。この海中で身を清めることを潮垢離（しおごり）といったそうです。

多田さんは、山の中のゲストハウスが満杯になってきたことを受けて、「もっと海岸沿いの熊野古道の良さや、田辺湾での潮垢離なども観光体験としてアピールしていきたい」と言います。海岸沿いのルートは、気

候温暖な土地柄もあって冬でも楽しめる上、山中よりも道に迷うといった危険も少ないという運営上のメリットがあります。

インバウンド客があふれる地域がある一方で、なかなかうまく呼べない地域もあります。やはり地域の新たな魅力を自ら発掘して、発信し続けるのが王道なのだと感じました。

日経BP総合研究所 上席研究員

渡辺 和博



Watanabe Kazuhiro

わたなべ・かずひろ

PROFILE

日経BP総合研究所 上席研究員。1986年筑波大学大学院理工学研究科修士課程修了。同年日本経済新聞社入社。IT分野、経営分野、コンシューマ分野の専門誌編集部を経て現職。全国の自治体・商工会議所などで地域活性化や名産品開発のコンサルティング、講演を実施。消費者起点をテーマにヒット商品育成を支援している。著書に「地方発ヒットを生む 逆算発想のものづくり」（日経BP社）。